

今さら聞けないQ&A

# 日本OL協会「ディレクター」

村越 真

日本オリエンテーリング協会に、ディレクターという公的資格がある。いわゆる指導者だが、日本オリエンテーリング委員会時代からの指導員制度に比べると、知名度と取得への関心は今ひとつである。今回の「いまさら聞けないQ&A」は、そのプロモーションもかねて、「JOAのディレクター制度」

ディレクターは文部科学大臣による野外活動指導者認定事業による野外活動団体であるキャンプ、サイクリング、ホステリングとの合同資格である。合同資格なので、資格取得のためにはオリエンテーリングの講習に加えて、野外活動共通（専門共通科目）の内容である危機管理や自然教育などの内容、また共通科目であるスポーツ心理学などを受講しなければならない。

それぞれに要求される時間数は半端ではない。ディレクターには1級と2級という二つの級があるが、1級の場合、専門科目を40時間、専門共通を20時間受講する必要がある。朝から夜までフルに講習会をやっても最大10時間しか取れないから、上記講習を行うためには丸6日。土日を利用すればほぼ6週末が必要とされる量である。また2級の場合には、専門が30時間、専門共通が30時間である。

これだけ講習すればさぞ立派なディレクターが誕生するだろうと思われるが、同時にこれだけの講習を受けることができる人がいったいどれくらいいるのだろうかという疑問も湧いてくる。しかし実際には、1級では専門科目は30時間、専門共通を10時間やって、後の20時間は通信教育。つまりレポートを書けばOKなのである。2級の場合、実際の講習は20時間、残りの40時間がレポートである。

平成10年に制定され、その後旧制度の1-3級からの移行措置が行われたものの、その後ディレクター講習会は一度も開かれていない。ちなみにキャンプ協会を除くサイクリング協会、ホステリング協会でも移行後一度も養成講習会は行われていない。キャンプ以外の協会にとっては、危機管理

や自然観察の専門家を手配することは難しい。野外活動として共通科目を設定するという理念は結構なものだが、どうにも無理があったと思わざるを得ない。それだけのせいでもないだろうが、この文部科学大臣認定の野外活動指導者認定は平成17年度で終結する。これも構造改革、民間委譲の余波なのだ。

これからのディレクター制度はどうあるべきなのだろうか。大臣認定制度の終焉は、それを考えなおす絶好のチャンスである。それまで「おかみ」に任せれば間違いないと考えてきたのが、自分たちに本当に何が必要かを考えなければならないときが来たのだから。オリエンテーリングを普及・発展していくためには指導者にどんな資質が必要なのだろうか。それ以前に、オリエンテーリングが社会に対して何を果たしていかなければならないかを考える必要がある。

移行後初めて開催された今年のディレクター講習会では、こうした長期的なビジョンも視野にいれると同時に、受講者のスキルアップとともにオリエンテーリング界とJOAの発展・活性化につながるいくつかのセッションが設けられた。

大会を想定したコントロール位置のチェックや位置説明・地図へのコメント演習。指導対象を限定した指導プランのグループでの作成、大会で想定される危険とその対策についてのグループ討論などは、受講者にとっても新鮮な体験であると同時にJOAにとっても

貴重な情報源となった。

JOAとしては、来年度以降も、同様な体制で講習会が開催されるとともに、一般あるいは取得後のスキルアップ研修ともタイアップしながら、情報交換と交流の場づくりも視野に入れながら、今後も講習会を開催していく予定である。

参考：今年の1級講習の内容

- ・コースプランニング講習
- ・地図とコントロールチェック実習
- ・競技規則等解説・討論
- ・普及・運営実践報告会
- ・トレイル0講義+実習
- ・危機管理・危険認知等野外教育全般について
- ・大会の見学と講評

(村越 真)



青森から参加の井上さん。「Oが大好き」という情熱を生かす場づくり先組織の重要な仕事だ。



トレイル0実習の風景